

主 題：初めの愛

聖書箇所：黙示録 2章1－7節

年度の最後を迎えるにあたって、今日はいつものローマ人への手紙から離れて、聖書の一番最後の書、黙示録2章1－7節をごいっしょに学びたいと思います。

黙示録2－3章には、教会に宛てた主イエス・キリストのメッセージが記されています。また、そこには主イエス・キリストによる教会の評価が記されています。教会に対する評価です。皆さん、主は私たちの教会をご覧になってどのような評価を下されるでしょうか？主はあなたをご覧になってどのような評価を下されるでしょうか？この手紙の中にあるように、「あなたの教会にはこのような良いところがある」とそのように言うだけでいいところが私たちのうちにあるでしょうか？また、あなたの教会にはこのように非難される悪いところがあると言われることはないでしょうか？この2－3章には七つの教会が記されています。エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、そして、ラオデキヤの教会。これはその当時、実際に存在した教会です。そして、ここに見られる特徴はすべての教会史に存在し、また、存在する教会に関連した内容が記されています。時代を越え地域を越えているのです。こういう教会はどの時代にも存在しました。また、存在するのです。エペソとラオデキヤの教会は非常な危機の中にありました。スミルナとフィラデルフィアの教会は非常に良い状態にありました。残った三つの教会は良くも悪くもない状態でした。そのことがここには記されています。

今日、私たちが見たいのはこの七つの教会の中で一番最初に与えられたエペソ教会への手紙です。このエペソにある教会に宛てられた手紙を、2章の1節から7節までごいっしょに見て行きたいと思います。「2:1 エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。:2 「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。:3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。:4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。:5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。:6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。:7 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。』」

☆エペソにある教会について

1. あいさつ 1節

最初に、この1節に出て来る「あいさつ」ですが、そこには教会の主権者がだれなのか、そのことを主ご自身が記しておられます。教会の主権者とはだれなのか？教会はいったいだれのものなのでしょう？

1) 宛先

この1節にはこの手紙の宛先と手紙の送り主が記されています。宛先はこのように書かれています。「**エペソにある教会の御使いに書き送れ。**」と、これが宛先です。エペソにある教会、これは先ほど話したようにエペソという町に存在した教会のことです。この当時、エペソはこの地方で最大の都市でした。カイステル川の河口近くに位置したこの町は、商業の中心地でもありました。今でもエペソに行くと、世界七不思議の一つであるアルテミス神殿が残っています。その中には女神アルテミス、ローマの人々にはダイアナと呼ばれて知られていたのですが、その像が残っています。人々はその女神を崇拝していた訳です。ですから、パウロが第二次宣教旅行でこのエペソに行った時に、そのアルテミス神殿に仕えている者たち、それをもって商売をしている者たちとのやりとりが記されています。そして、第三次宣教旅行のときにパウロは、エペソではなく近くのアラソに立ち寄り、そこにエペソの長老たちを呼び寄せている記事が「使徒の働き」20章に出て来ます。使徒の働き20:31には「**ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。**」と、パウロが3年の間このエペソに滞在したことが記されています。パウロはこのエペソにどの町よりも長く滞在したのです。しかも、このエペソ教会の最初の長老はあのテモテです。そして、ここにはアクラやプリステラ、また、雄弁で聖書に通じていたアポロが訪問しています。後には、ヨハネがこの町の指導者になったと伝えられてもいます。このようにこれだけ聖書に通じた非常な信仰的な霊的な者たちがこの教会と関わっていたのです。そのエペソ、そこに存在する教会と記されています。

◎教会とは？

私たちがまず考えておきたいことはこの「教会」ということばです。私たちはこのことばを頻繁に使ったり見たりします。このことばは「～の中から」と「間から呼ばれた」という二つのことばが合成して出来ています。ですから、教会は「呼び出された者たちの集まり」です。神のために呼び出された者たちの集まりです。実は、このことばに関して、エルサレム会議でユダヤ人だけでなく異邦人もこの救いにあずかったというバルナバとパウロの話を聞いたヤコブが、面白い説明を加えるのです。そこに今私たちが話している「教会」についてその意味が記されています。使徒15：14「**神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。**」、ここに出て来ました。神が人々をお召しになったのです。ご自分の御名をもって民をお召しになった、呼び出されたのです。今、私たちが学んでいるこの「教会」ということばの意味はまさにここに表わされているのです。だれが呼ばれたのか、だれが召されたのでしょうか？先ほどから見ているようにそれは神ご自身です。主なる神がある人々をその暗やみの中から、罪の中から、永遠の滅びの中から、神ののろいの中から呼び出してくださった、選び出してくださった、その人たちが教会なのです。確かに、教会というところのような建物を指したりもしますが、同時に、教会は真にイエス・キリストの恵みによって救われた人々のことを指すのです。ですから、パウロはこの教会のことを「神の教会」と呼んでいます。Iコリント10：32「**ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい。**」、また、イエスが「**わたしの教会を建てます**」と言われたことを思い出されませんか？マタイの福音書16：18「**ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。**」。イエスは「**わたしの教会を建てます。**」と言われました。

ですから、私たちが分かっていることは、教会、つまり、神の恵みによって救われた私たち、神がご自身の意志をもって、ご計画をもって、罪の中から救い出してくださった、呼び出してくださった私たち信仰者、クリスチャンは、当然、その神のために生きる者たちなのです。なぜなら、私たちは神のものだからです。ペテロはクリスチャンに対してIペテロ2：9でこのように言っています。「**しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。…**」、私たちは神の所有、神の持ち物なのです。神はなぜそのようなことをされたのでしょうか？その目的です。「**それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。**」、これが目的だと言っているのです。ですから、イエス・キリストの恵みによって救われた私たちが生かされている目的は、このすばらしい神の救いを人々に宣べ伝えて行くためです。また、ローマ人への手紙6：4でパウロはこの救いに関してこのように教えています。「**私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。**」と、つまり、パウロはクリスチャンは「**今までの自分はもう死んだ者である**」と言うのです。神に逆らい神を無視して生きて来た自分は死んだのだ。そして、私たちはキリストとともによみがえって来た、だから、新しい歩みをすると言うのです。同じローマ6：11－13ではパウロはこのように言っています。「**このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。**」、私はもう罪に対しては死んだのだ、これまで神に逆らって来た私は死んだと。12節「**ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってははいけません。**」、これまでと同じ生き方をしてはならないと言うのです。13節「**また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。**」と。生き方が変わったと言っているのです。生き方は変わると言うのです。罪の中を喜んで選択して生きて来たこれまでの私たちが、今度は、自分のからだを自分の人生を、私を救ってくださった私の神のために生きよう、神にささげて生きて行くと言うのです。

だから、多くの皆さんが覚えておられると思いますが、Iコリント6：19「**あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。**」。もう、あなたがたは神によって罪の中から買い取られた者だと言うのです。20節にこのように続きます。「**あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。**」、生き方が変わったのです。生きる目的、目標が変わったのです。神の栄光のために生きて行こう、神が喜んでくださることをして行こう、そのことを追い求めて行こうと、そのように信仰者は生まれ変わったのです。そのような人々が本当のクリスチャンであり、そのような人々が教会であり、そして、そのような人々が集まっているのが、このような地域の教会なのです。

◎教会の御使いとは？

黙示録2章に戻って、1節で「**エペソにある教会の御使いに書き送れ。**」と見ました。主イエスご自身がこのように命じられたのです。エペソにある神によって選ばれた教会の人々にということですが、ここ

に「御使いに書き送れ」と書かれています。私たちは「御使い」と聞くすぐに天使を連想します。でも、ここで使われているこのことばは少し違います。確かに、そのような霊的存在、つまり、天使にも使われます。天使の中の良い天使にも悪い天使にも使われるのですが、同時に、このことばは人間の使節、すなわち、ある命令を受けて遣いをする人のことです。天使としても、また、使節としてもどちらにも使われるのです。明らかに、ここでは教会の中にいる天使たちにこのメッセージが与えられているとは、私たちは信じることは出来ません。この教会にある人間である使節に対してこのメッセージが与えられているのです。この使節、御使いとはいったいだれでしょう？これはその教会を代表する霊的なリーダーのことです。そのことを私たちはこれから見て行くのです。

2) 送り主

エペソの町にある教会、その教会の霊的なリーダーたち、その人々にこのメッセージを与えなさいと言われたのです。これが手紙の送り先です。そして、だれが送ったのか？イエスであると先ほどから話して来ました。1節の後半に『**右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。**』とあります。この方が言われると言うのです。「七つの星」とは1：20に「**わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。**」とある通り、「**七つの教会の御使いたち**」と書かれています。ですから、「七つの星」というのは、その七つの教会の霊的なリーダーたち、教会の長老たちと言うことが出来ます。そして、「七つの金の燭台」とは「**七つの教会**」のことです。そのようにみことばが私たちに説明してくれています。「**右手に七つの星を持つ**」とは何を意味するのでしょうか？右手というのは「権威」です。つまり、主が言われていることは、ご自身の権威をもって、その教会をそのリーダーたちを治めておられるということです。言い方を変えると、主がその霊的リーダーを用いて、ご自身の主権的ご支配を為しておられるということです。教会は神のものだと言っているのです。神はそのような霊的リーダーたちを支配し用いてみわざを為されるということです。その主が、リーダーたちにこのメッセージを与えたと言っているのです。

1節の「**七つの金の燭台の間を歩く方**」ということばとよく似たことばが1：13，16に出て来ます。13節「**それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。**」、16節には「**また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。**」とあり、「七つの星」と「燭台」が出ています。でも、2：1と違う所は「**七つの金の燭台の間を歩く方**」、この方は「**歩く方**」だと言われています。何を意味しているのでしょうか？それは、この主が教会の間を動き回り、その教会を注意深く見つめ観察しておられるということです。だから、この主はその教会に対して正しい評価を与えることが出来ると言うのです。最初に話したように、この七つの教会に対して神ご自身からの評価が下っているのです。なぜ、そのようなことが出来るのでしょうか？神はその教会の間を動いておられるから、教会の様子を見ておられるからです。ですから、最初にこの「あいさつ」の中のみことばが私たちに教えているのは「この教会はいったいだれのものか」ということです。

2. 教会への評価 2－4節

そして、二つ目に教えていることは、2－6節にある「主ご自身による教会への評価」です。エペソ教会をどのように評価されたのかということです。2節「**わたしは、あなたの行ないと**」、主はしっかり彼らの行ないをご覧になっておられるのです。そして、その行ないを見て、そこには素晴らしいところとそうでないところがあると言っています。素晴らしいこととして三つ上げています。2節には「**労苦**」ということばと「**忍耐**」ということばが出て来ました。そして、その後「**また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。**」とあり、ここに三つのことが書かれています。

1) 称賛 2－3節

(1) 従順

一つ目の「**労苦**」ということばは彼らの「従順さ」を表わしています。このエペソ教会の人々は主に対して非常に従順な人たちでした。彼らは神のみことばに対してとても従順でした。というのは、この「**労苦**」ということばは「**疲れ果てるほどの労働**」という意味です。「**疲れ切るまで働く**」ということです。心身を使い尽くして労することです。先ほど見て来たように、クリスチャンとはキリストのために熱心に労する者たちです。エペソ教会の人々は、主のみことばに従って、そして、そのみことばに忠実に従い続けて行こうとしていたのです。みことばを学び、みことばの教えに従おうとしていた。そのような点から言うなら、もしかすると、私たちよりはるかに信仰的だったのかもしれませんが。私たちの問題はみことばを聞いていてもなかなか実践しないからです。しかし、このエペソの教会の人々に対する主の評価は、彼らは非常に熱心だった、その労苦を主はご覧になってそれを誉められたのです。熱心であり真剣だったのです。主に対して誠実だったのです。みことばを軽く扱うのではなく、そのみことばに本当

に従って行こうとしている、そのような人々だったのです。熱心さに関して、ある人は自分の体力を言い訳にするかもしれません。パークレーは面白いことを言っています。「体の労苦が出来ない場合にも、クリスチャンはなお祈りの労苦を続ける者である。」と。耳が痛くありませんか？私たちは常に為すべき働きを探りながら、捜しながら、その働きを一生懸命にする者たちです。もしかすると、私たちはいろいろな弁解や言い訳をして、先ほどから見ているように、神の一方的なあわれみによって、神ご自身が私たちを罪から救い出して、招いて、この神のために生きようと呼び出してくださったという、このすばらしい救い、特権にあずかっていながら、そのように生きていない信仰者が多いのではないのでしょうか？あなたはどうか？エペソの教会の人々が行ないにおいて非常に従順な者たちでした。

(2) 忍耐

二つ目に「**忍耐**」ということばが出て来ました。このことばが私たちに教えている彼らの行ないは、彼らは常に主を信頼して生きたということです。この「**忍耐**」というのは、心の中は煮えくりかえっているけれども、黙って耐えるということではないのです。心の中は本当に憤っているけれど、それでも我慢して耐えるということではないのです。この「**忍耐**」とは様々な苦難や患難、損失に勇ましく勇気をもって立ち向かい、その恵みを栄光に変えるものだと言うのです。つまり、ここで言われている「**忍耐**」は、このエペソ教会のクリスチャンたちに見られる姿です。彼らはいろいろな困難や問題、迫害に遭遇したにもかかわらず、そこで立ち止まらなかった、彼らは見るべき方を見て、しっかりその方を信頼し、そして、信仰者として歩み続けたのです。どんな時にも主を疑うのではなく、主を信頼して歩み続けたのです。それが彼らだったのです。どんな時にも主を信頼して生きる、どんな問題があっても、思い通りに物事が進まなくても、すべてを支配しておられる神を見上げて、その方を信頼して生きたのです。

この点においても、私たちは彼らから見てはるかに劣っているかもしれません。どちらかと言うと、私たちは周りを見るもの、周りで起こっていることによって左右されてしまいます。すぐに希望を失ってしまいます。神に助けを求めて、神の最善の解決を求めるのではなく、人間的な解決を求めようとします。そのような過ちを犯しがちな私たちと比較してみるなら、このエペソのクリスチャンたちはどんなときにも主を信頼し続けたのです。彼らはすばらしい信仰者だったのです。主に対して従順で、いつも主を信頼して生きたのです。

(3) 聖さ

三つ目に出て来るのは、先ほど読んだ通り、間違いを見極めることが出来ること、彼らの特徴と言えること、それは彼らは聖い者たちだったということです。「**聖さ**」においても彼らはすばらしい行ないをしていたのです。「**使徒と自称している**」と言います。そのように言うけれど、実は、彼らは使徒ではなかった。そして、「**その偽りを見抜いた**」と言います。偽りの教師たちのその間違った教えを拒否するのです。みことばの教えに反することを拒んだのです。どのようにしたのでしょう？彼らは彼を「**ためして**」とあります。この「**ためして**」ということばは「試験をする」、「吟味をする」ということです。つまり、このエペソのクリスチャンたちはしっかりとみことばをもって、入ってくるいろいろな教えに対して、それが聖書的なのかどうかを判断することが出来たのです。その霊的識別力というものを彼らは持っていたのです。パウロは警告を与えました。使徒20：29「**私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。**」、第三次宣教旅行の時にパウロはこのようなことを言いました。私が出て行った後、必ず、狂暴な狼があなたたちの中に入り込んで来て、教えを混乱させると言うのです。そこで彼らがしたことは、このパウロの教えに従って、入って来るいろいろな教え、人々が語っている様々なことに対して、果して、それが聖書的なのかどうかを常に吟味し試験して、そして、神の前に正しい教えを守ろうとしたのです。だから、聖さを保とうとするのです。教えの純潔を守ろうとしたのです。間違いなく、彼らは罪に対して正しく対処しました。なぜなら、イエスはそうに教えられたからです。兄弟姉妹が罪を犯したらどうしますか？その兄弟姉妹の所に行って、その罪を悔い改めるように命じるのです。もし、私たちがそのようにしないで、周りの人々、本人以外の人たちにその人の問題を語ったとしたら、私たちはその時点で罪を犯したことになるのです。ゴシップの罪です。

ですから、このエペソの教会は非常にすばらしい行ないを実践していたのです。神からのすばらしい称賛があったのです。彼らは従順であり、信頼を置いて歩んでいて、そして、彼らは聖さを守ろうとしていました。いかなる罪が教会に入ってくることも、また、いかなる罪も教会の中にあることを拒んだのです。ですから、教会の中で兄弟姉妹が罪を犯していたら、その罪を教会から除くように、その罪を悔い改めるように勧めて、悔い改めない時はマタイの福音書18章で教えるように、彼らを教会から追い出したのです。それは聖さを保つためです。エペソ教会の人々はそのような人々だったと私たちは見ることができます。そのようにこの聖書が私たちに教えてくれるのです。

しかも、もう一つ、6節にこのように書かれています。「**ニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。**」と。

この「ニコライ派」というのはよく分からないのです。黙示録の中にしか出て来ないことばです。ただ、ペルガモの教会に対する教えの中にもこのニコライ派の人々のことが出て来ます。2：15「**それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。**」と。2：12から記されているこのペルガモの教会に対する教えを見て、ここにニコライ派の教えがどのような教えだったのか、直接的な詳しい説明はないのですが、14節にバラムの教えと非常に類似しているとそのヒントが出ています。2：14「**しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。**」、そして、15節「**それと同じように、**」と書かれています。ですから、このバラムの教えと非常に似通った教えを、このニコライ派の人たちがしていたということを私たちは見ることができます。おそらく、偶像にささげた物を食べさせることや、不品行を行なわせることへの奨励を教えるようなものだったのでしょう。エペソの人たちはこのような偽りの教えに対して抵抗しています。面白いことです。このエペソの教会の人々は「ニコライ派の人々を憎んでいる。」とは書かれていません。「**ニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。**」とあります。

主ご自身もそうでした。主が憎んでおられたのは何でしょう？この「間違った教え」です。間違った教えを主は憎んでいる。そして、このエペソの人々もこのような偽りの教えに対して、真っ向からその教えを憎んだのです。私たちの周りにもたくさんのキリスト教と名の付くもので偽りの教えを奉じているグループがあります。どのような教えでも構わない、キリストの愛さえ教えていたらと言うのです。とんでもないことです。神の望まれること、神がお喜びになることは、神が教えてくださったことに忠実であることです。驚くべきことは、このエペソの教会の人々はそのような歩みをしていたということです。その点が称賛されたのです。そして、3節を見てください。「**あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。**」、2節で言われたことがここでもう一度繰り返されています。この「**耐え忍び、疲れたことがなかった。**」というのは、今見て来たように、彼らは一生懸命いろいろな困難、患難の中で主に対して従い続けたということです。「**わたしの名のために**」と書かれています。この人々は主イエス・キリストのために生き続けたのです。主イエス・キリストのためだから、いかなる労苦であっても喜んでそれを受けようとしていました。その中にあって、妥協するのではなく継続してこの主のためにだけ生き続けようとしていたのです。ここで使われている「**疲れたことがなかった。**」ということばは、先ほど2節で見た「**労苦**」と同じ意味をもっています。3節ではこのことばが動詞形で使われています。エペソ教会の人々のことが見えて来ましたか？主に対して非常に従順に、そして、この主に信頼を置きながら、そして、主の教えに純潔であろうとしました。「**私たちは主のためにしているのだ。主のために私たちは生きて行くのだ。**」と、そのように生きていたのです。パウロたちがカイザリヤの伝道者ピリポの家を訪問した時のことが、使徒の働き21章に出て来ます。21：8－13「**翌日そこを立って、カイザリヤに着き、あの七人のひとりである伝道者ピリポの家にはいつて、そこに滞在した。：9 この人には、預言する四人の未婚の娘がいた。：10 幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。：11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される。』と聖霊がお告げになっています。』**と言った。：12 私たちはこれを聞いて、土地の人たちといっしょになって、パウロに、エルサレムには上らないよう頼んだ。：13 するとパウロは、**「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしていますのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。」と答えた。**」。主イエスのためなら私は喜んでいのちも犠牲にしますという、そのような真剣さ、そのような熱心さ、そのような思いをもってパウロは生きたのです。

そして、私たちはそれに似た歩みをしているこのエペソ教会のクリスチャンたちを見るのです。行ないの点から言えば、本当にすばらしい者たちでした。称賛に値する人々でした。模範にするべき人々でした。ところが、このようなすばらしい人々に対して4節を見ると今度は非難が記されています。

2) 非難 4節

4節「**しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。**」、この「**離れてしまった**」というのは非常に強いことばです。初めのときのすばらしい熱い愛の高揚を完全に捨ててしまったという意味です。イエスを信じ救われた時にもっていたその喜び、感謝、主に対する心からの愛を捨ててしまったと言うのです。それがこの4節に記されているのです。もちろん、その理由は簡単に言えば「罪」だと言えます。でも、このエペソの教会が誕生してからこの手紙が送られるまでに40年以上経っているのです。パウロがエペソ人への手紙を書いてからこの黙示録が記されるまでは35、6年も経っています。エペソ人への手紙が記される前に教会は存在しています。ですから、教会が誕生してから少なくとも40－50年ぐらい経っていたのです。そうするとどのようなことが起こるでしょう？教会の中に世代交代が起こります。信仰をもった第一世の者たち、最初にクリスチャンになった者たちは、

その過程の中で戦いをしています。自分がクリスチャンになったことで、その異教の中にあって異教の習慣に対して戦いを挑みます。「このことはしない、偶像礼拝はしない！」と。そうすると家庭の中で戦いが起きます。そのようなことを通して、その人の信仰はしっかり鍛えられて行きます。ところが、そのような戦いのない環境に生まれ育った者たちは、自分の信仰をわざわざ戦う必要もありません。その中でも信仰が成長すればいいのですが、もちろん、成長させてくださるのは神ですが、患難や困難が私たちの信仰を鍛えるなら、それらを経験しない彼らはある面で弱さがあるかもしれません。今でも世界中で何十万という人々が殉教していると皆さんにお話しました。迫害は私たち人間にとっては嬉しくないことです。私たちのところに訪れないことを期待しますが、迫害によって信仰が成長することも事実です。迫害の全くない国に住んでいる者たちは、もしかすると、その信仰はなまぬるいものになってしまう可能性があります。普通のクリスチャンの家庭を見ても、最初に信仰をもった者たちの信仰と、その後生まれてきた子どもたちの信仰はどうでしょう？もちろん、子どもたちの信仰が強くなって欲しいのですが、悲しいことに、逆に弱くなっているケースがあります。

この教会を見て早や60年経ちました。当初、主を心から愛して主の教えに従順に従い主を信頼し聖さを守っていた人々がいたのです。エペソ教会の初代クリスチャンたちも確かに、主の教えに従順に、どんな時にも主を見上げて歩もうとし、教理的な教えの純潔を守ろうとしていましたが、時間の経過とともに、一番肝心なところが失われてしまったのです。それは主に対する愛です。最初にお話したように、これはエペソ教会だけの問題ではありません。どの時代でもどこの教会にも起こり得る大変な問題です。皆さんの信仰はどうでしょう？一生懸命奉仕をしておられるかもしれません。礼拝や集会に万難を排して出席されているかもしれません。犠牲的にささげ物をしておられるかもしれません。でも、考えなければいけないことは、そのすべての正しい行為が神への愛から生まれ出ているものなのかどうかです。もしそうでなければ、このエペソ教会に私たちが見ているように、どんなに素晴らしい働きも主の前ではむなしいと言うのです。

I コリント13章でパウロが愛について教えたときに、パウロはこのように言いました。1-2節「**たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。：2 また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていたとしても、愛がないなら、何の値うちもありません。**」、愛に基づいた行為でなければ、愛が動機になっていなければ、あなたの働きはむなしいと。この教会には非難される大きな問題があったのです。一番大切な部分に問題があったのです。主への愛が段々薄れて行くなら、そこから起こることは主以外のものに対する愛が増し加わって行くということです。ヨハネがIヨハネ2：15で「**世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。**」と言っています。二つのものを同時に愛せない、どちらかだと言うのです。神を愛するか世を愛するかです。そして、神への愛が段々薄れて行くということは、私たちが見るべきところを見ていないということです。愛すべき方を愛していないのです。間違ったところを見、愛するに値しないものを私たちはまた愛し始めるのです。

このような大変な状態にあったエペソの教会に対して神は何をなさったのでしょうか？警告を与えています。

3. 警告 5節

でも、実はこの警告は神の愛です。なぜなら、神は彼らにやり直すチャンスを与えてくれているからです。5節「**それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行つて、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。**」、感謝です！神が私たちに罪を犯してはならない、もし、犯すならあなたは救いを失うと言われるなら、私たちは皆救いを失っています。イエスを信じた私たちは、神の前に罪を犯したくないと願ってそのように正しく生きようとしますが、現実には、罪との葛藤に破れることが多いのです。でも、感謝なことに、私たちの神は赦しの神なのです。神は何度でも赦してくださる神です。この5節を見たとき、そこには神の警告があります。でも、神はこの警告を与えることによって彼らに「悔い改めてわたしの所に帰って来なさい」と、悔い改めのチャンスを与えてくださっているのです。やり直しのチャンスを与えてくれているのです。ここには三つの命令が記されています。

◎警告に関する三つの命令

1) (どこから落ちたかを) 思い出す

主イエスが言われていることは、かつて主を愛して喜んで主に仕えていたときの喜びや満足を思い出してみなさいということです。そのときには心から喜んで本当の満足をもって日々を歩んでいたはずです。物があってもなくても私たちの心の中には、物によっては絶対に得ることの出来ない神への感謝、神への喜び、神から与えられる満足をもって私たちは生きていました。それはこの世のものによっては

得ることの出来ないものです。「思い出してごらんなさい」、主が与えてくださった喜びは、他のものとは比較にもならなかった。そのような神の与えてくださったすばらしい祝福、喜びを思い出し続けてみなさいと言います。あなたはイエスを信じたとき主のみことばを心から愛していたはずです。主のみことばを愛し、主のみことばを学ぶことを本当に喜びとしていたはずです。詩篇 119：47 で著者が「**私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。**」と言っています。同じ 97 節にも「**どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。**」とあります。「私はあなたのことばを愛します。あなたのことばを私はもっと学びたいです。もっとあなたのことばを聞きたいです。」と、その時のことを思い出して見なさいと言うのです。あなたはかつて主を喜ばせることを心から愛していたはずです。主に喜んでいただくことだけを考えて、最善を尽くしていたときのことを、主に喜んでいただきたいというその思いをもって一生懸命行っていたその時のことを思い出しなさいと。あなたは主に仕えることを愛していたはずです。どんなことでも、たとえ人が嫌だと言うことでも「神さま、あなたのためにできることを感謝します」と言って、あなたは喜んで主のために行っていた、その時のことを思い出して見なさいと言うのです。このすばらしいキリストによる唯一の救いを、すべての人に知ってもらいたいと思ってこの福音を宣べ伝えていた、いかなる迫害も恐れずに宣べ伝えていた、その時のことを思い出して見なさい。主イエス・キリストの福音を伝えることができたその喜びがあなたの心を支配して、「主よ、感謝します。あなたの福音を語ることができたことを」と、そのように福音を伝えることが出来たことを喜んでいて、その時のことを思い出して見なさい。どんな迫害があっても主のみことばに喜んで従い、主に喜んでいただくと思って歩んでいた、その時のことを思い出して見なさい。主の家族、兄弟姉妹を心から愛していたときのことを思い出して見なさい。主によって救われて主の家族とされたことを喜び、兄弟姉妹を愛していた時のことを。しかし、残念ながら、いつの間にか私たちはあの人が嫌いだとか、この人は私の性格に合わないと言って、兄弟姉妹と憎み合ってしまう、さばき合ってしまうのです。思い出して見なさい、主によって救われたときにあなたがもっていた兄弟姉妹に対するその純粋な愛を。「**どこから落ちたかを思い出しなさい**」と言います。

2) 悔い改める

二つ目の命令は「**悔い改めて**」とあります。今、その罪をきっぱりと捨てなさいということです。その罪から完全に離れなさいと言います。「神さま、私の怠慢を許してください。あなた以外のものを愛していたその間違った信仰生活を赦してください。人に対してもっていたその悪い思いを許してください。あなたのみことば以外のものを愛していた私を許してください。あなた以外のものを喜ばせることを求め始めた私を許してください。あなたの福音を語ることが怠けていた私を許してください。」と。どこから落ちたかを思い出して、その罪を主の前に悔い改めなさいと。「**『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』：38 これがたいせつな第一の戒めです。**」（マタイ 22：37－38）ということは、あなたが「**心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛**」していないなら、あなたは罪を犯しているのです。知っていましたか？もし、あなたが神以外のものを愛しているなら罪を犯しているのです。なぜなら、神の命令は「**心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。**」です。I ヨハネ 4：20－21 には「**神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。：21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。**」と記されている通りです。同じ I ヨハネ 5：1 にも「**イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。**」とあります。あなたはそうに歩んでいましたか？「罪を悔い改めなさい！」。

3) (初めの行ないを) しなさい

そして、三つ目の命令は「**初めの行ないをしなさい。**」です。この「しなさい」というのが命令です。もう一度働き始めなさいと言うのです。もう一度、あの救われたときにもっていた「主よ、どうぞ私を用いてください」というその思いをもって為していたその働きに戻りなさい、今すぐにその働きを始めなさいと、そのことを主ご自身がエペソの教会に命じたのです。

彼らが落ちてしまったのは、突然落ちたのではないのです。徐々に落ちて行っただけです。ですから、「**どこから落ちたかを思い出しなさい**」と言うのです。私たちは知らず知らずのうちに段々神から離れて行き、気づいたときには、なぜ、こんなに主に対して冷え切っているのだろうか？なぜ、かつてもっていたような主に対する愛情がなくなってしまったのだろうか？という状態になるのです。それはあなたの生活の中にある小さな罪を許してしまったことが原因です。その罪があなたのうちで広がり、そして、また次の罪を許してしまい、また次の罪を許してしまう、そして、いつの間にかあなたは主から離れてしまうのです。そのような、主ご自身の警告があります。先程も話したように、この警告には「**神のところに立ち返って来なさい**」という神への招きがあるのです。でも、もしその招きを拒んだらどうなるの

でしょう？この5節の後半にはそのように拒んだ者への警告があります。5 b 節「もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」、これは神のさばきのことです。でも、再臨の話はしていません。ここでは神のさばきなのです。先ほども見たように、この燭台とは教会のことでした。それをどうするのか？それを置かれた所から取りはずしてしまう、つまり、神は教会をそこから無くしてしまうということです。エペソ教会はどうなったのでしょうか？今、エペソの町を訪問するとそこに遺跡が残っています。そこには教会はありません。主イエス・キリストが警告されましたが、悲しいことに、彼らはその警告に耳を傾けなかったのです。その結果、主が約束されたように、このすばらしい教会は無くなってしまったのです。証を失うだけでない、その存在さえもなくなってしまったのです。

この2節には最後に皆さんに覚えていただきたいことがあります。「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。」、この「知っている」ということばです。ペンがあれば丸印をしておいてください。ここで使われている「知っている」ということばは、一般的に使われる「知識を全身的に得て行く」というそのようなことばではありません。「いろいろなことを通して知識を得る」ということばが使われてはいないのです。私たちはいろいろな経験を通して知識を得て行きます。でも、この主イエスご自身が言われた「…を知っている」ということばは、そのように人間が全身的に知識を得て行くということばではなく、ここで使われているのは「完全な知識」という意味です。「完全に知っている」ということです。神は教会のことを完全に知っている、知らないことは何一つないと言うのです。しかも、あなたのことにしても同じだと言うのです。あなたのすべてのことを完全に完璧に知っておられるのです。神はまだあなたに関して知らないことがあるのではないのです。全部知っていると言うのです。教会の本当の状態も知っておられるし、もちろん、あなたの心も知っているのです。

皆さんどうでしょう？あなたの心を知っておられる神、その神に対してあなたは形だけの信仰生活を送っていませんか？このエペソの教会のようにすばらしい働きがあったとしても、あなたの心に問題があった。その働きの動機が正しくなかった。愛から出ていなかった。そして、非難されました、警告を与えられました、悔い改めるようにと。あなたは悔い改める必要はありませんか？

最後に簡単に見ます。勧告と約束が記されています。

4. 勧告と約束 7 節

ここに祝福への招きがあります。7 節「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」、主ご自身が言われることは「わたしの言うことばに耳を傾けなさい」です。しかも、エペソの教会だけではありません。「諸教会」とあります。複数形です。この神のメッセージをすべての人々が聞かなければいけない、すべての教会が聞かなければいけないと言うのです。そして、祝福の約束があります。だれに対してでしょう？「勝利を得る者に」対してです。勝利を得る者とは救われた者たちのことです。神の恵みによって救われた者、選び出された者たち、クリスチャンたちに対して神はこのような約束を与えたのです。「…わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」と、創世記 3：22 の最初に出て来ます。アダムとエバが罪を犯したときに、神は彼らがいのちの木の実を食べないように彼らを追い出されました。しかし、黙示録 22 章を見ると、新しい「新天新地」になってクリスチャンはその木の実をいただくのです。つまり、イエス・キリストを信じた者にはこの永遠のいのち天国が約束されているということです。

なぜ、この話を最後にしたのか？それはクリスチャンにとってこの永遠の天国を考えるときに、信仰が、そして、今現在の生き方が変えられて行くからです。なぜなら、天国を考えたときに私たちの心は喜び始めるからです。ローマ人への手紙 5：1－12 を私たちが学んだときに、パウロがそこで教えてくれたように、私たちが神のみわざを覚えたときに、そして、この祝福にあずかっている私たちに与えられているすばらしい神の約束を覚えるときに、当然、私たちの心に湧き上がって来るものがあります。あの十字架で主イエス・キリストが為してくださった犠牲を覚えるときに、そして、その犠牲によって救われた私たちに与えられたすばらしい神の祝福を覚えるときに、私たちの内側から出て来るのは、この主に対する喜びと感謝です。パウロが教えてくれた通りです。それはだれかがそのように言っているからそうしなければいけないものではありません。神のすばらしさを味わい、神の約束を覚えるときに、私たちの内側から出て来るものです。「神さま、感謝します。有難うございます。」と、そして、そのとき、心から主に喜ばれるように今日生きて行こうとするのです。ですから、主イエス・キリストもここで、もう一度、信者の希望である天国のことを教えるのです。こんなにすばらしい祝福をいただいているあなたは、今日、どのように生きているのですか？形だけの信仰生活を送っていませんか？あなたの主への愛は未だしっかりと燃えていますか？あなたの主への愛は増し加わっていますか？主への感謝は増し加わっていますか？すべてのことを愛をもって為していますか？あなたは何よりも主を愛していますか？

イエスはこのように言われました。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。**また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。**」(マタイ10:37)、何を言われたのでしょうか？神だけを愛しなさい！神を一番に愛しなさい！ということです。なぜなら、この方によって私たちは造られ、この方によって私たちは救われ、この方のために生きる者として生まれ変わっているからです。どうですか、あなたの愛は？イエスがシモン・ペテロに3回も質問されました。「あなたはわたしを愛しますか？あなたはわたしを愛しますか？あなたはわたしを愛しますか？」と。あなたはどのようにお答えになりますか？

主はどのような評価を私たちの教会に下されるのでしょうか？主は、どのような評価をあなたに下されるのでしょうか？自らの心をしっかり吟味して、私の心が神の前に正しいのかどうか吟味して、願わくは、一人一人がこの神を心から第一に愛する者として、これから残された人生を歩むこと、それを願って止みません。それが神が望んでおられることです。